

# 「物自体は存在するか」という伝統的な問題の解決によせて

千葉 清 史

物自体 (Dinge an sich) の存在の問題——これについては、カント解釈史において長らく論じられてきたにもかかわらず、いまだ解釈者の間で十分な一致が見られているとは言い難い<sup>1</sup>。こうした状況に面すれば、この問題はそもそも解決がつかないのではないかと考えられても不思議ではない。こうした疑念に対して私は、議論状況の明瞭化が図られるならば、こうした伝統的な問題に関してすら我々は解釈において前進できる、ということを示したい。

『純粹理性批判』の枠組みにおいては物自体の存在は認められなければならない。これが私が本論考で擁護するテーゼである。周知のごとく、この主張そのものにはいかなる新味もない。本論考の意義は、このテーゼを擁護する際に考慮されるべき諸論点を整理することにある。

具体的考察を始める前に、まず問題設定に関する重要な限定を明示しておくことにしたい。物自体の存在の問題に関する解釈者の間の不一致が生ずる原因のうち最も重要なものは、この問題について、カント自身が相反する言明をなしている、ということである。私は、これが単なる、カントの「筆が滑った」ものとして片づけることができない、真の不整合であるということを知る。その上で、私が目指すことは、『純粹理性批判』の全ての主張、ではなく、少なくともその諸主張・議論のうちの重要なものを整合的に理解可能にするような、物自体についての理論を提示することである。カント自身はそのような理論をどこにお

いても提示していないので、そのような理論を仕上げることは、解釈者の側の仕事となる。——問題設定におけるこの限定は、明示化されるべき第一の論点である。この限定のもとでは、ある解釈を、それに反するよう見える二、三のテキスト上の箇所を挙げつらうことによって反論する、といったようなやり口は、根本的に的外れなものとなる。残念ながら、カント解釈においてはこの手の「反論」なるものがしばしば見られ、それによって解釈論争が非生産的なものとされることが少なくないので、そのようなことがないよう、私はまず初めにこの点に読者の注意を喚起しておくことにしたい。

本論考は、物自体の存在の問題を扱うにあたって考慮されるべき論点を列挙することを主要目的とする。これらの論点に関する実質的な考察については、Chiba 2012a を参照されたい。本論考は私のこの著書における成果に依拠しているが、しかしながら、私の実質的考察の成否とは別に、物自体の存在を扱うにあたって考慮されるべき論点を明瞭化することには、独立な価値があると私は信ずる。

本論考における考察は次のように進む：まず第一節で、現象と物自体の区別に関する三つの異なる解釈枠組み、すなわち、二世界解釈、形而上学的二側面解釈ならびに方法論的側面解釈を区別する。この枠組みのそれぞれにおいて、「物自体」という語で意味されることが変わってくる。第二節では、物自体の存在を立証する有力な議論の候補として、「触発からの議論」を検討する。この議論には周知の困難がある。本節ではその問題点を明らかにすることが試みられる。第三節では、「触発からの議論」の改良版を提案する。この改良版は、前節で紹介される困難を含む多くの問題を回避するものであるが、物自体の存在主張なら

\*カントの著作からの引用は慣例に従い、『純粹理性批判』に関しては第一版と第二版の頁数を、それ以外については、タイトルならびに、アカデミー版の巻数とその頁数を示す。

<sup>1</sup> 新カント派の時代とは異なり、今日の主流は、物自体の存在を認める解釈である。とはいえ、物自体の存在/現実性を否定したり、あるいは、少なくとも物自体の存在主張の可能性を否定する論者は依然として存在する。Cf. e.g. Melnick 1973, Rescher 1972, 1981, Hanna 2001 and Bird 2006.

びに物自体に対する少なくとも存在／現実性のカテゴリーの適用を避けることはできない。第四節においては、物自体の不可知性ならびに物自体に対するカテゴリーの適用不可能性という論点は、物自体の存在主張をも否定するものではない、ということを示す議論の概略を提示する。最後に、本論考における考察を振り返り、物自体の存在の問題において前進するために考慮されるべき論点を総括する。

### 第一節 「物自体」：三種の異なった理解

物自体は存在するか？少なくとも、この問いそのものが意味するところは明らかであるように思われる——が実のところそうではない。「物自体」という語でそもそもどのようなことが意味されるのか、ということが、解釈図式によって異なるからである。今日代表的な解釈図式としては、「二世界解釈」「形而上学的二側面解釈」「方法論的二側面解釈」の三者がある。これらの解釈図式の内実に関して私はすでに別稿で論じたので<sup>2</sup>、ここではこれらの区別については簡単にのみ触れ、そのそれぞれについて「物自体」がどのように理解されるのか、ということに重点をおいて説明する。

二世界解釈と二側面解釈の違いは、現象と物自体の区別を、二種類の異なる存在者の間の区別と解するか、それとも同じ一つの物の二つの側面の間の区別と解するか、ということである。二世界解釈は前者の理解をとり、現象を我々の表象・認識・意識——以降、「認識」で代表させる——に依存して存在する物、物自体を我々の認識から独立に存在する物とみなす<sup>3</sup>。

<sup>2</sup> 千葉2012b ならびに2014を参照。なお、以下で「方法論的二側面解釈」として紹介されるものは、千葉2012bにおいて「首尾一貫した」方法論的二側面解釈、と呼ばれたところの立場である。（私が千葉2012bにおいて示したように、方法論的に「二側面」解釈の典型例と目されるヘンリー・アリソンのものは内的不整合を犯すものである。方法論的二側面解釈がとり得る諸ヴァリエーションについては、千葉2014、第三節を参照。）

<sup>3</sup> 「認識依存／独立性」については、千葉2014、14-16頁、より詳細な説明としては、私が現在準備中の「ダメットによる実在論／反実在論定式：カント超越論的観念論解釈のために」を参照されたい。

二側面解釈は形而上学的ヴァリエーションと方法論的ヴァリエーションに区別される。前者においては、現象——より正確には、物の現象的側面——とは、物の、我々の認識のあり方に依存してあるあり方と理解され、物自体——より正確には、物の自体的側面——とは、物の、我々の認識から独立なあり方とされる。このように考えられる限り、二つのあり方が帰属する物そのものは、認識から独立に存在する、と想定されることになる（というのも、認識から独立なあり方をそもそも持ち得る存在者は、それ自体、認識から独立に存在しているはずだからである）。これに対し、後者、すなわち方法論的二側面解釈においては、二側面が帰属せしめられる物そのものは、我々の認識に徹頭徹尾依存するもの、とされることになる。その上で、そのような物の現象的側面とは、我々の感性との関係において考察されたその物のあり方のことであり、また、自体的側面とは、その物について、我々の感性を捨象された上でさらに純粹悟性ないし理性によって思考される限りにおけるあり方である、とされることになる。

さて、物自体の存在をめぐる論争において重要なのは次の点である：以上で示されたように、解釈図式ごとに、「物自体」という語の意味することが変わってくるのだが、こうした解釈図式の選択によって、物自体の存在についての決断もある程度なされてしまう。例えば、形而上学的二側面解釈のように、「物自体」を、認識独立的に存在する経験の対象がもつ、認識独立的側面と考えるならば、そうした側面は、たとえその具体的なあり方が我々には不可知であるとしても、少なくともその現実性は認められざるを得なくなる。（というのも、認識独立的に存在する物が、認識独立的なあり方を持たない、と考えることは不合理であるから。）方法論的二側面解釈においては、逆に、認識独立的なものの存在はそもそも初めから問題とならない。物の「自体的」側面とはむしろ、我々が経験的に認識する物に関して、経験的認識以外の仕方を通じて措定されるその物のあり方のこと

であり、このような側面の現実性は、カントの実践哲学に依拠して——『純粹理性批判』の用語を用いれば、「理論的認識源泉」とは異なる「実践的認識源泉」（BXXVI Anm.）から——容易に承認されるものとなる。

すなわち、形而上学的であれ方法論的であれ、二側面解釈を採用してしまえば、物自体——より正確には物の「自体的」側面——の存在主張に関しては、自動的に立場が肯定的なものに決定されてしまうのである。これに対し、二世界解釈においてのみ、物自体の存在がそもそも考慮に値する問題となる。というのも、この解釈図式においてのみ、認識独立な物として想定された「物自体」なるものが、実のところ存在しないのかもしれない、という可能性も生じてくるからである。解釈図式と物自体の存在へのコミットメントに関する以上の関係は、十分に意識される必要がある。

とはいえ、物自体の存在を問う際に、特定の解釈図式を前提とせず、《カント哲学において認識独立な物（ないし物の認識独立の様態）の存在は認められるべきか？》と問うことも可能である。本論考はこのアプローチをとり、認識独立な物（ないし様態）としての物自体の存在主張の正当性を示す議論のアウトラインを提示することを試みる。このことが証されれば、少なくとも方法論的二側面解釈が退けられることになるだろう<sup>4</sup>。

## 第二節 触発からの議論

物自体の存在を証する、カント哲学における論拠としては二種類がある。一つは、ヘンリー・アリソンが「意味論的議論」と呼ぶところの、《現象が存在するならば、現象してくる当のものが存在するのだからなければならない》と論じるものであるが（cf. Allison 2014, pp.54f.）、この論拠の難点

はよく知られている<sup>5</sup>。

本論考が、物自体の存在主張を基礎づける論拠として注目するのは、いわゆる「触発からの議論」というものである。本節で私はまず、触発についてのカント自身の理解に基づく議論を構成し、続いて、この議論の問題点を明らかにする。（この考察に依拠して、次節で、「触発からの議論」の改良型が提案されることになる。）

「触発からの議論」とは、端的に表現すれば、次のようなものである：我々の経験的認識における受容性の契機は、我々を触発して我々のうちに感覚を生ぜしめる、（我々の認識から独立に存在する物としての）物自体の存在を要求する。触発とは、我々に受容的に感覚が与えられる過程である。物自体による触発は、カント研究文献において伝統的に「超越論的触発」と呼ばれてきた。

この議論の中心的論拠は受容性である。ここで、カントにおける受容性の二つの含意を確認しておこう。

- (1) 「非自発性」我々認識主観が受容する感覚は、我々の自発性の所産ではない。
- (2) 「他のものからの影響」感覚が生ぜしめられるのは、認識主観とは数的に異なるものが認識主観に影響を及ぼすことによる。

含意(1)が受容性の概念のうちに含まれることは明

<sup>5</sup> 最大の難点は以下の点に存する：経験の対象をカントが「現象」と単に名づけた、ということから、その現象に何かそれ自体で存在する物が対応しなければならない、ということが帰結することはない。例えば二世界解釈の枠組みで、このことは全く明らかなことではない。また、方法論的二側面解釈の枠組みでは、「それ自体で存在する物」ということそのものが否定される。一方、形而上学的二側面解釈が前提されるならば、意味論的議論が述べるようなことは、この解釈枠組みの中でさらに物自体の存在を立証するようなものではありえない。それはむしろ、形而上学的二側面解釈の主張の一部にすぎない。

従って、次のように結論できる：《現象は、認識独立な物が我々に現象してきたあり方である》という考えを（形而上学的二側面解釈におけるように）あらかじめ受け入れているのでない限り、意味論的議論に説得力はなく、また、仮にそのような考えを受け入れているのなら、そのことに加えて意味論的議論を持ち出すことに論証上の何の利益もない。従って、意味論的議論はいずれにせよ、論拠としては無力である。

<sup>4</sup> Chiba 2012a で私は二世界解釈を擁護した。形而上学的二側面解釈は私が「実在論的解釈」と呼ぶところのものに帰着せざるを得ず、そして実在論的解釈は『純粹理性批判』全体を整合的に理解することに失敗する、というのがその理由である。しかしこのことを説得的な仕方でも論証するためには、極めて詳細な考察が必要となる。

らかだが<sup>6</sup>、無視できない多くのカントの言明は、彼がさらに含意(2)も受容性の要件とみなしていたことを証拠立てる。例えば、「対象が我々を触発する」というタイプの全ての表現がそれにあたる<sup>7</sup>。（自己触発でもない限り、この対象は認識主観とは別のもののはずである。）また、こうした表現においては、まさに他のものからの因果的影響すら示唆されている。

さて、自発性の以上の二つの含意に依拠すれば、経験的認識の受容性から触発する物自体の存在を導く次のような議論を再構成できる。（その際、(2)は(1)よりも強い主張である（すなわち、(1)は(2)に含意される）ので、(2)にのみ注目すればよい。）

Step 1：経験的認識のためには、触発によって認識主観に感覚が与えられなければならない。（受容性の事実）

Step 2：触発するものは認識主観とは数的に異なるものでなければならない（受容性の含意(2)）

Step 3：触発するものは認識独立的なものではない。というのも、認識に依存するものは、認識の質料を生み出すことはできないからである。

Step 4：しかしながら、カントの超越論的観念論によれば、少なくとも空間的对象は認識独立的ではない。従って、前項より、触発するものは空間的对象ではありえない。それは二世界解釈における意味での物自体が、形而上学的二側面解釈の意味での物の自体的側面ではないからである。

この議論については、カント自身の受容性概念に基づいているとはいえ、その難点はよく知られている。とりわけ有名なのは、この議論においては、カント自身が明示的に禁じている、カテゴリー——ここではとりわけ数多性ならびに因果性のカテゴリー——の物自体ないし物自体間の関係（触発するものとされるものとの間の）への適用が行われている、というものである。

しかしながら、こうした特殊カント的要件に訴えなくとも、上の議論はそれ自体で欠陥を持つこともまた示され得る。ここでは特に Step 2 に注目しよう<sup>8</sup>。一体どうやったら、我々に感覚が与えられている、ということから、感覚を生ぜしめる我々とは数的に異なるものが存在する、ということ結論することができるのだろうか。感覚は、我々の自発性によって生ぜしめられるのではないにせよ、他のものからの影響を全く必要とせず、それ自体でいわば「自動的に」我々の心のうちに生じてくるようなものであるかもしれないではないか？<sup>9</sup>

上の議論はこのような可能性を排除することができない。また、『純粹理性批判』においては、因果律の妥当性は経験の対象に制限されるので、『純粹理性批判』体系内でこのような可能性を排除する議論を作り上げる見込みもない。このことから言えることは、上の議論は単なる細部の手直しや議論の補填によって改良されるようなものではなく、むしろ根本的に変更されなければならない、ということである。私は次節でその仕事に取り掛かる。

### 第三節 触発からの議論、改良版

私が提案する変更は、先に整理された受容性の

<sup>6</sup> 「しかしながら私は『第二版超越論的演繹 §20』の証明においては、ある一点、すなわち、直観に対して多様が、悟性の綜合に先立って、これとは独立に、与えられなければならない、という点を捨象することはできなかった。」（B145, 強調千葉）また、『道徳形而上学の基礎づけ』, AA 5, p. 451においてカントは、「感官の表象」を「我々の恣意 Willkür なしに我々のもとに來たる表象」として性格づけ、それを、「我々が単に我々自身から生み出す」悟性の表象と区別している。

<sup>7</sup> Cf. e.g. A19/B33, A20/B34, B41, A26/B42, B69, A35/B51, B72, A51/B75 and B129.

<sup>8</sup> Step 3に相当する議論については Van Cleve 1999 (pp.164-7) が詳細な考察を行い、擁護しているので、それを参照されたい。

<sup>9</sup> Falkenstein 1995はこのような可能性を示唆している：「感覚は生の事実として与えられた与件 brute-factually given data と解されることもでき、その源泉を説明することは、意味の限界を超えることなしには不可能である」(ibid., p. 326)。

二つの含意のうち、(1)非自発性のみを用いて触発の議論を再構成することである。本節ではまずその議論を提示し、次に想定される反論に答えることによって、それを擁護していくことにしよう。

私が提案する議論は次のようなものである：

Step 1：経験的認識のためには、触発によって認識主観に感覚が与えられなければならない。

（受容性の事実）

Step 2：感覚は我々の自発性の所産ではない（受容性の含意(1)）。換言すれば、感覚が我々の心性において生ぜしめられる過程——すなわち、触発の過程——は、我々の自発性に依存しない。

Step 3：従って、この過程は、我々の認識にも依存しない。というのも、我々の認識は受容性と自発性の協働によって初めて生じるがゆえに、自発性から独立なものは認識全体からも独立であるはずだからである。

Step 4：しかしながら、超越論的観念論によれば、認識から独立なものは空間的対象ではあり得ない。従って、触発の過程は物自体の側で生じている過程であらざるを得ない。——さて、我々には実際に感覚が与えられているから、少なくともそれを生ぜしめる物自体的過程は現実的である（あるいはそのようなものとしての物自体が存在する）。

まず、この議論（以下、議論 T と呼ぶことにする）によって何が証明され、何が証明されないのかを確認しよう。積極的に証明されているのは、我々の認識から独立な何かが存在し、この何かが我々の経験的認識に関与している、ということである。それに対し、議論 T によって証明されていないことは、感覚を生ぜしめる物自体が認識主観から数的に区別されるものでなければならない、ということである。このことによって議論 T は、数多性ならびに因果性のカテゴリーの物自体に対する適用にコミットする必要がなくなる。それは例

えば、我々から数的に区別される物自体が我々に因果的影響を及ぼす、といった帰結を持たない。

さて、議論 T に対する次の二つの批判を考察することを通じて、議論 T の内実をより明瞭ならしめることにしよう。

批判 1：先に言われたことに反し、議論 T においては潜在的な仕方でも因果推論が用いられているのではないか？というのもそれはいずれにせよ、結果としての感覚からそれを生ぜしめる物自体の存在を結論せんとしているのだから。

これに対しては次のように応答できる：議論 T がもし、感覚の存在から出発して、《感覚が我々の心性のうちに存在するならば、それを生ぜしめる物自体がなければならない》と論じるのであったならば、この批判は妥当するが、議論 T は実のところそうはなっていない。それが依拠するのは、単に感覚が存在することではなく、むしろ、我々に（我々が自発的に生み出したのではない）感覚が与えられる、ということの現実性である。議論 T は、この現実性のいわば意味分析に過ぎないのだ。すなわち議論 T は次のことを示す：《我々に感覚が与えられる》という事態が現実性である、とは、《認識独立的なものが存在しそれによって感覚が生み出される》ということを含意する<sup>10</sup>。これは因果推論ではない。

批判 2：先に、議論 T は、我々から数的に区別される物自体が我々に因果的影響を及ぼす、といった帰結を持たない、と言われた。その結果として、議論 T は、前節で提示された議論を窮地に陥らせることになった、《感覚は、我々の自発性によって生ぜしめられるのではないにせよ、他のものからの影響を全く必要とせず、それ自体でいわば「自動的に」我々の心のうちに生じてくる

<sup>10</sup> アディッケスは、物自体の存在はカントにおいては因果推論を通じて証明されるようなものではなく、むしろ現象ないし「ア・ポステリオリな素材 aposteriorischer Stoff」において自らを開示するようなものなのだ、と主張したが（Adickes 1924, p. 11, p. 35）、私はこれに賛同する。私が議論 T によってなそうとしたのは、アディッケスのようにこのことを単に「カントの実在論的体験」と言って片づけるのではなく、このことを受容性の含意(1)からの帰結として正当化することである。

ようなものであるかもしれない》という可能性を許容する。このことによって議論 T は前節で提示された議論の欠陥を回避するが、しかし一方で、議論 T によって正当化される結論が「触発の理論」と呼ばれるに値する<sup>11</sup>のか、疑念が生じてくる。というのも、主観から数的に異なるあるものから因果的影響を受ける、ということは、「触発」という概念の不可欠な含意なのではないか？ 議論 T がこの含意を放棄するならばそれは、いかなる意味でも「触発の理論」とは呼ばれ得ないのではないか？ 議論 T はむしろ、カント体系においては、経験的であれ超越論的であれ、触発など不要であることを示したものであるのではないか？

こうした批判は尤もなものであるが、それに対し私は次のように応えたい：議論 T は、認識主観が、自らと数的に異なる観知的実体から因果的影響を受ける、と結論することは控えるが<sup>11</sup>、少なくとも、自発性を行使して経験的世界を構成する主観が、その際、自らの自発性の影響下<sup>12</sup>にないものから影響を受ける、ということを示す。そしてこのことは実質的に、超越論的触発を肯定する論者が典型的に主張し、それに反対する論者が典型的に否定してきたこと、すなわち、(1)物自体が存在し、(2)それからの影響により認識主観は感覚を得る、という二点を示すことに他ならない。この意味において、議論 T の結論はやはり「触発の理論」と呼ばれるに値するものである。

とはいえ、議論 T は、「物自体 *Dinge an sich*」についての通常理解の変更を迫る、ということでは強調に値する。議論 T は、触発する物自体が、個体としてイメージされるようないわゆる「物」とは根本的に異なるものであるかもしれない、という可能性を排除しない。例えば、「物自体」とは、「我々の心のうちに（自発性から独立に）感覚が生じる」という過程、あるいはその際の単なる秩

<sup>11</sup> 議論 T はしかし、そのようなことはない、と否定的に結論するわけでもない。そのようなことについては結論できない、というように不可知論に留まるだけである。こうした応答は、物自体の不可知性からしても、適切なことである。

序のようなものであるのかもしれないし、あるいはそれどころか、およそ我々にとって端的に理解不可能なものでさえあるのかもしれないのだ<sup>12</sup>。

（それがともかくも我々の認識から独立に存立するものである、ということだけは理解されるが。）

しかし、このような可能性は、カント哲学において「物自体」という語を用いることの障害になるとは考え難い。というのも、物自体とは、すでにカント自身の理解において、そのあり方が全く認識不可能なもの、通常の時空的事物とは全く異種なものであるはずだからだ。従って、議論 T が、「物自体」や「触発」のあり方を未規定のままに残す、ということは、カントによる物自体の不可知性テーゼに照らして、よりふさわしいことである、とすら言えよう。

#### 第四節 物自体の不可知性／ カテゴリー適用の問題

以上によって、経験的認識の受容性の契機から触発する物自体の存在を立証する論証が提示された。これは、数多性ならびに因果性のカテゴリーを使用していない、という点において、触発から物自体の実在を示す伝統的議論に対してヤコービ以来典型的に指摘されたきた困難から免れている。しかしながら、議論 T はいずれにせよ物自体の存在主張をなすものである。ここで次の問題が生じる：物自体の存在主張そのものは、『純粹理性批判』の根本的主張として有名な、物自体の不可知性——以下、「不可知性テーゼ」と呼ぶ——ならびに物自体へのカテゴリー適用の不可能性——以下、「カテゴリー適用不可能性テーゼ」と呼ぶ——に反しないのだろうか？

<sup>12</sup> 物自体とはこのようなものである、と議論 T が積極的に主張するわけではないのはもちろんである。議論 T は、現象的個体と一対一対応する複数の物自体が存在し、それらが認識主観に因果的影響を与える、という（初学者がカントの「物自体」について持つであろうような）見解や、それどころか、（カント自身が知覚の積極的説明としては拒否している；cf. A390f.）ライプニッツ流の予定調和すら、可能なシナリオとして許容する。物自体が不可知である以上、こうした可能性が排除されないのはむしろ適切なことである。

こうした問題を、《カントは実際に物自体の存在を積極的に主張している》といった単なるテキスト的事実に訴えて片づけることはできない。また、《カントはカテゴリーの超越論的使用を認めていた》ということに訴える<sup>13</sup>ことも、この場合には無力である。というのも、カテゴリーの超越論的使用とは、カテゴリーを、（少なくとも理論哲学の枠内では）認識要求を行わない「単なる思考」において用いることであるが、物自体の存在主張においては、まさに単なる思考を超えた認識要求が立てられているからである<sup>14</sup>。

この問題を解決する実質的な考察を行うためには独立の論考を要する。ここでは、この問題を解決する際に考察されるべき諸論点を列挙するにとどめる。

まず、不可知性テーゼに関する論点から始めよう。物自体の存在や物自体による触発を否定する論者の多くは、不可知性テーゼの正確な内実ならびにそのためのカントの議論を吟味することなく、不可知性テーゼが物自体の存在主張にまで及ぶ、と単純に想定してしまっている<sup>15</sup>。しかしながら、まず、カントが不可知性テーゼについて語る際の表現を見るならば、この想定の見えしきは明白なものとなる。

物自体の認識可能性が否定される多くの箇所において、否定されているのは単に、物自体が何であるか、どのようなものであるか、ということについての認識である。例えば次を見よ：

「諸対象がそれ自体で、我々の感性のあらゆるこれらの受容性から離れて、どのようなものであるのか、ということは我々にはまったく知られないままである。」（A42/B59）<sup>16</sup>

<sup>13</sup> こうした論法の例としては、Adickes 1924, 第四節, Langton 1998, pp. 49f., ならびに Allais 2010, p. 16を参照。

<sup>14</sup> この点は、例えば Falkenstein 1995, p. 315ならびに Willaschek 2001, pp. 220f. において指摘されている。

<sup>15</sup> Cf. e.g. Bird 2006, Prauss 1974, Rescher 1972 and 1981.

<sup>16</sup> 同様の例としては次も参照：A38/B55, A43/B60, B67f, 276f./B332f., A277/B333f., A288f./B344f., A478f./B506 Anm., A540/B568.

それどころか、一見すると物自体の全面的不可知性が語られているように思われる文脈で、その存在については明示的に例外とされているような箇所すらある：

「・・・我々のア・プリオリな理性認識は、単に現象に関するのみで、ことがら自体 [Sache an sich] については、我々の理性認識はそれを、それ自体としては現実的なものである [für sich wirklich] が我々には知られないものとしてあらしめる・・・」（BXX；強調千葉）

また、不可知性は物自体のあり方についてのもので、その存在は認められなければならない、と明言されている箇所もある<sup>17</sup>。——それに対して、カントが物自体の（その存在も含めた）全面的不可知性を主張しているように読めなくもないテキスト箇所は意外なほど少なく<sup>18</sup>、またそこにおいて本当に物自体の（その存在も含む）全面的不可知性が主張されているのか（それともカントが不適切にそのように表現してしまっただけなのか）は決して明らかではない。いずれにせよ、不可知性テーゼの表現を見る限り、カントが物自体の存在主張をも否定している、と結論することには非常な無理がある。

もちろん、単なる表現は解釈にとって決定的な要件ではない。カントが不可知性テーゼについて語る表現がどのようなものであれ、彼が不可知性テーゼを立証する論拠が物自体の全面的不可知性を立証するということになれば、テーゼそのものもそのように理解されざるを得ない、ということ

<sup>17</sup> 『プロレゴメナ』, AA 4, p. 314f., 『道徳形而上学の基礎づけ』, AA 4, p. 451ならびに 『ムロンゴヴィウス形而上学』, AA 29, p. 857を参照。

<sup>18</sup> そのような箇所として私が見つけた箇所は次の三か所のみである：BXXIX, A49/B66, A286/B342。ここでは第二のもののみ引用しよう：「それ [現象として与えられる物] については、その形式に関して多くのことが言われ得るが、これら現象の基礎にあるかもしれないその物それ自体については決していささかのことも [niemals das Mindeste] 言われ得ない」（強調千葉）。

になろう。しかしながら、カントの議論はそのようなものではない、と私は主張したい。この問題を詳細に論じる余裕はないので、ここでは、私の議論のアウトラインを示すにとどめよう。

不可知性テーゼに対するカントの論証は、およそ次のように総括できる<sup>19</sup>：

Step 1：直観なしに我々は現実的な物に関して

およそ何ごととも認識することはできない。

Step 2：我々の（感性的）直観は、物がそれ自体

であるあり方を認識せしめない。

Step 3：従って我々は、物がそれ自体でどのよ

うにあるのかを認識することはできない。

全体の議論において決定的であるのは Step 2 である。この論拠の中心的論点はいくまで、我々の直観は、その感性的性格のゆえに、認識独立的な物がそれ自体であるあり方を表象しない、ということであり、認識独立的な物が存在することが知られ得ない、ということではない。この総括が正しいとすれば、不可知性テーゼについてのカントの議論が、存在主張の不可能性を含まない理由が理解されよう。

カテゴリー適用不可能性テーゼについても、それにカントが与えている論拠を考察することが重要となる。その論拠には二種類のものがあり、一つは、《カテゴリーの適用のためには感性的直観が必要となるが、感性的直観は物自体を認識せしめないで、カテゴリーを物自体の認識に用いることもできない》というものである<sup>20</sup>。これは結局のところ、先の不可知性テーゼのための論拠に帰着するため、特にこの論点物が物自体の存在主張

<sup>19</sup> カントが不可知性テーゼに対する論証を提示している箇所は実のところ非常に少ない。以下のものは、そのものも詳細な、『純粹理性批判』「超越論的感性論」A42f./B59f. のものである。（なお、Step 1に相当する論拠は有名な「超越論的感性論」冒頭文（A19/B33）からのものであるが、A42f./B59f. においても前提されていると考えられて然るべきである。）

<sup>20</sup> 例えば、B146-149（「超越論的演繹」、§§ 22-23）、A238-240/B297-299（「フェノメナとヌーメナ」）を参照。

に対して障害になることはない。

しかしながらカントは、カテゴリーの物自体に対する適用不可能性に関するより強い主張を行っていてもいる。それによれば、カテゴリーの物自体に対する適用不可能性とは、単に、先に述べられたような、個々のカテゴリーを物自体に具体的に適用する手がかりは我々にはない——例えば、物自体に関して、それが一つしかないのか、複数あるのか（すなわち、単一性のカテゴリーを適用すべきか、数多性のカテゴリーを適用すべきか）決める手がかりは我々にはない——、ということに留まらない。それはむしろ、カテゴリーによって思念されること（すなわち、物のカテゴリー的規定）が、物自体の側に存することを我々は知り得ないと主張するものである<sup>21</sup>。すなわち、物自体に関しては、例えば「単一性／複数性」「実体／性質」という枠組みで語ること自体が不適切であるのかもしれないのである。これは物自体に関する非常に極端な不可知論である。というのも、カント哲学の枠組みによれば、カテゴリーは我々の思考一般にとって不可欠な概念であり、従ってカテゴリーが上述の意味で妥当しないものは、単に認識され得ないだけでなく、適切には思考すらされ得ないものであるはずだからだ。

さて、この強い意味におけるカテゴリー適用不可能性テーゼのための論拠は次のものである：我々の表象が、我々の表象から独立に存在している対象を正しく表しているかを確認するためには、我々の表象と対象を直接比較することができるのでなければならないはずであるが、それは不可能である<sup>22</sup>。この論拠が認められるならば、我々は、我々がカテゴリーによって表象したこと（すなわ

<sup>21</sup> カテゴリーに関してカントが実際にこのような主張をなしている箇所として、A129を参照。

<sup>22</sup> 『純粹理性批判』に関してはA104を参照。この論点は、カントの論理学諸講義において“Dialele”という名称のもとで繰り返し言及されているものである。最も詳細なものとして、『フィリップス論理学』、AA 24, p. 387を参照（ここでは“Dialele”という話のかわりに“Dialectic”という話が用いられているが）。私は、千葉2004において、この論点がカントの超越論的観念論に対して持つ含意について考察した。



ち物のカテゴリー的規定）が、認識から独立に存在する物（すなわち物自体）に実際に妥当するかどうかを知り得ない、ということになる。

この論拠そのものの妥当性は今は問わないでおこう。目下の文脈において問題であるのは、カントのこうした考え方に従えば、存在のカテゴリーをも含む全てのカテゴリーが物自体に適用できない、ということになるかどうか、ということである。

そうはならない、ということが示され得る。ここで、（存在 Dasein = 現実性 Wirklichkeit のカテゴリーを含む）様相のカテゴリーの特殊性が考慮されるべきである。カントによれば、可能性・現実性・必然性という様相のカテゴリーは、対象の事象内容、すなわち、対象が何であるのか、という点には関わらない、という点で他のカテゴリー（量・質・関係）と本質的に相違する（cf. A219/B266）。この特質から、少なくとも存在のカテゴリー（をはじめとする様相のカテゴリー）は、上述の論拠からの議論の例外となる、と結論できる。というのも様相のカテゴリーは対象の事象内容に関わるものではないから、それに対応するものが物自体の側に存在するか否か、といったことは問題にならないからである。

以上の点に鑑みれば、カテゴリー適用不可能性テーゼもまた、物自体の存在主張の不可能性を帰結するものではない、と結論することができよう。

以上のものに加えて、さらに次の論点も指摘しておこう：『純粹理性批判』のうちには、物自体の存在主張どころか、「物自体」といったものを想定することそのものを否定していると理解できなくもない議論も、ごく少数であるが存在する。そのような議論は、『純粹理性批判』の「フェノメナとヌーメナ」ならびに「反省概念の多義性の註」にのみ見出され<sup>23</sup>、およそ次のように総括される：

<sup>23</sup> Cf. A252f., B308f., A254-6/B310-12, A287/B343.

Step 1：我々はヌーメノン、すなわち物自体<sup>24</sup>を我々の感性的直観によってもカテゴリーによっても認識することはできない。

Step 2：にもかかわらずヌーメノンを、現象と並ぶ何か現実的な物として少なくとも考えるためにすら、我々は知的直観が実際に可能であること（reale Möglichkeit）を証し得るの  
でなければならない。

Step 3：しかしそのようなことは不可能であるので、我々はヌーメノンを現実的な物として想定することはできない。

この議論の核となる論拠は Step 2 であり、またこの議論全体の弱点もこの箇所に存する。知的直観なしに我々はヌーメノンがどのようなものであるか認識できない、と主張するならば何の問題もない。しかし、ヌーメノンの領域を現実的な物として単に想定するだけのために、なぜ知的直観が必要となるのか、納得いく説明は全く与えられていない。そして実際、前節で示された議論 T は、知的直観のようなものに全く訴えなくとも、物自体の存在を証明できる、ということを示した例である。

以上で、物自体の存在主張を否定するように見える論点を駆け足で概観してきた。私の今までの主張の十全な正当化のためにはより詳細な議論が必要となるが、以上の概観を通じて、少なくとも次のことは理解していただけるであろうと思う：本節で提示された論点が、『純粹理性批判』のテキストに即して検討されるならば、不可知性テーゼやカテゴリーの適用不可能性テーゼ、あるいは「フェノメナとヌーメナ」や「反省概念の多義性の註」において見られる、物自体についての否定

<sup>24</sup> ヌーメノンと物自体の等置を疑問視する解釈者も存在する（cf. e.g. Collins 1999）が、カント自身が当の等置を実際に行なっている箇所が多く見いだされることに鑑みれば（例えば B307, A254/B310, A256/B312, A259/B315, A287/B344, A288/B345, A289/B346, B422 Anm.; 『プロレゴメナ』, AA 4, p. 312, p. 315; 『純粹理性批判の無用論』, AA 8, p. 207, p. 208）、こうした解釈は極めて疑わしいものと言えよう。

的言明から、天下りの的に、「物自体の存在主張は不可能である」という結論を導き出すようなことはできない。

以上で紹介された論点を最後に一覧の仕方で提示することによって、本論考を閉じることにしたい：

論点1：物自体に関するカントの発言の中から、それら全てを整合的なものとする解釈を導き出すことを目指す（純粋な積義的考察）か、それともそのようなことは不可能であるという理解のもとで、カントの主張・議論のうち少なくとも中心的なものを整合的に理解することを可能にする物自体の理論を——時にカントの言に反して——再構成することを目指す（合理的再構成）か？（私は後者を選択する）

論点2：解釈枠組みによって、「物自体」という語が意味することが変わってくる。二世界解釈、形而上学的二側面解釈、方法論的二側面解釈のうちいずれをとるか？あるいはこのうちのいずれでもない解釈を採用するのか（その場合その内実はどのようなものか、その解釈枠組みにおいては「物自体」はどのように理解されるのか）？あるいはさしあたり、どの解釈枠組みを採用するかは決断しないで、《カント哲学において認識独立的なものの存在は認められるべきか否か》という問題を扱うか？（私が本論考で採用したのは最後のアプローチである）

論点3：第二節で提示されたような形での「触発からの議論」をどのように評価するか？（私はこの議論には欠陥があると結論したが、ひょっとするとこの議論の本質的な要件、すなわち受容性の含意(2)を維持しつつ、この議論を改良する方策があるかもしれない。）

論点4：第三節で提示された議論Tをどのように評価するか？それは本当に数多性・因果性のカテゴリーを用いていないのだろうか。あるいはそれは本当に「触発」の理論の名に値するも

のなのであろうか？

論点5：物自体の認識不可能性について、それは物自体の存在主張までをもあらかじめ不可能とするようなものなのか？これに関して、認識不可能性テーゼのカントの表現と、そのための議論の双方が検討されるべきである。

論点6：カテゴリーの物自体への適用不可能性について、それは物自体の存在主張までをもあらかじめ不可能とするようなものなのか？これに関して、カテゴリーの適用不可能性テーゼのためにカントが挙げているいくつかの論拠が区別され、個別に検討されるべきである。

論点7：物自体を現実的なものとして単に想定することそのものを否定するように見えるカントの議論が存在する。この議論をどのように評価するか？（私は、そのような議論には説得力がなく、尊重するに値しない、と結論したが、それ以外の評価も当然可能であろう。）

こうした論点を、ごまかしなく、着実に考察していけば、物自体の存在のような古典的な難問に関してすら我々は解釈的に前進できる、と私は確信する<sup>25</sup>。

## 参考文献

- Allais, Lucy 2010: „Transcendental Idealism and Metaphysics: Kant's Commitment to Things as They Are in Themselves“, *Kant-Yearbook* 2, 1-31.
- Adickes, Erich 1924: *Kant und das Ding an sich*, Berlin, Pan.
- 1929: *Kants Lehre von der doppelten Affektion unseres Ich als Schlüssel zu seiner Erkenntnistheorie*, Tübingen, J. C. Mohr.
- Allison, Henry E. 2004: *Kant's Transcendental*

<sup>25</sup> 本論考は、日本カント協会第38回学会（2013年11月、早稲田大学）の口頭発表原稿に、加筆・修正を加えたものである。加筆にあたり、特に木阪貴行、中野裕孝両氏からのコメントに感謝申し上げたい。また、本研究は、MEXT 科研費26370004の助成を受けたものである。

- Idealism: An Interpretation and Defense* (Revised & Enlarged Edition), New Heaven, Yale University Press.
- Bird, Graham 2006: *The Revolutionary Kant: A Commentary on the Critique of Pure Reason*, La Salle, Ill., Open Court.
- Chiba, Kiyoshi 2012a: *Kants Ontologie der raumzeitlichen Wirklichkeit: Versuch einer anti-realistischen Interpretation der Kritik der reinen Vernunft*, Berlin, Walter de Gruyter.
- 千葉清史 2004: 『『純粋理性批判』第一版第四パラロギスムス論における検証主義的真理概念』, 日本カント協会編, 『日本カント研究5: カントと責任論』, 理想社, 61-75頁.
- 千葉清史 2012b: 「ヘンリー・アリソンの方法論的二側面解釈」, 日本カント協会編, 『日本カント研究13』, 理想社, 149-164頁.
- 千葉清史 2014: 「二世界解釈と二側面解釈: そもそも何が問題だったのか?」, 西洋近世哲学史懇話会編, 『近世哲学研究』第18号, 1-35頁.
- Collins, Arthur W. 1999: *Possible Experience: Understanding Kant's Critique of Pure Reason*, Berkeley, University of California Press.
- Falkenstein, Lorne 1995: *Kant's Intuitionism: A Commentary on the Transcendental Aesthetic*, Toronto, University of Toronto Press.
- Langton, Rae 1998: *Kantian Humility: Our Ignorance of Things in Themselves*, Oxford, Oxford University Press.
- Melnick, Arthur 1973: *Kant's Analogies of Experience*, Chicago, University of Chicago Press.
- Hanna, Robert 2001: *Kant and the Foundations of Analytic Philosophy*, Oxford, Clarendon Press.
- Prauss, Gerold 1974: *Kant und das Problem der Dinge an sich*, Bonn, Bouvier Verlag.
- Rescher, Nicholas 1972: „Kant on Noumenal Causality“, in his 2000: *Kant and the Reach of Reason: Studies in Kant's Theory of Rational Systematization*, Cambridge, Cambridge University Press, 21-35.
- 1981: „On the Status of “Things-in-Themselves” in Kant's Critical Philosophy“, in *ibid.*, 5-20.
- Van Cleve, James 1999: *Problems from Kant*, New York and Oxford, Oxford University Press.
- Willaschek, Marcus 2001: „Affektion und Kontingenz in Kants transzendentalen Idealismus“, in Schumacher, Ralph (ed.): *Idealismus als Theorie der Repräsentation?*, Paderborn, mentis, 211-31.

## Zur Lösung des traditionellen Problems: »Existieren Dinge an sich?«

Kiyoshi CHIBA

Existieren sogenannte „Dinge an sich“? – Obwohl dieses Problem durch die Geschichte der Kant-Interpretation hindurch heftig diskutiert worden ist, besteht doch bei Kant-Interpreten noch kein hinreichender Konsens darüber. Angesichts dessen dürfte man wohl denken, dass dieses Problem eigentlich unlösbar ist. Dagegen möchte ich in dieser Abhandlung zeigen, dass wir selbst bei einem solchen traditionellen Problem einen Fortschritt machen können, indem wir die Problemlage klar und deutlich machen.

Die Existenz der Dinge an sich muss im Rahmen der kantischen Philosophie anerkannt werden. Das ist die These, die ich in dieser Abhandlung verteidige. Wie bekannt, ist diese These als solche gar nicht neu. Die Bedeutung dieser Abhandlung besteht gerade darin, diejenigen Diskussionspunkte klar zu machen, die beim Problem der Existenz der Dinge an sich berücksichtigt werden müssen.

Die Abhandlung ist folgendermaßen strukturiert: Im ersten Abschnitt präsentiere ich drei Interpretationsschemata der kantischen Unterscheidung zwischen Erscheinungen und Dingen an sich, nämlich die Zwei-Welten-Interpretation, die metaphysische und die methodologische Zwei-Aspekte-Interpretation. Von diesen Schemata abhängig variiert es sich, was unter dem Terminus „Dinge an sich“ verstanden wird. Im zweiten Abschnitt untersuche ich das sogenannte „Argument aus der Affektion“ als den aussichtsreichsten Beweisgrund für die Existenz der Dinge an sich. Bekanntlich gibt es viele Schwierigkeiten mit diesem Argument. Im dritten Abschnitt schlage ich eine verbesserte Version dieses Arguments vor. Sie vermeidet zwar manche Probleme mit der vorherigen Version, kann aber ohnehin die Existenzbehauptung der Dinge an sich und die Anwendung der Kategorie der Existenz hierfür nicht entbehren. Im vierten Abschnitt verteidige ich meine verbesserte Version dadurch, zu zeigen, dass weder Kants Argument für die Unerkennbarkeit der Dinge an sich noch sein Argument für die Unanwendbarkeit der Kategorien hierfür die Existenzbehauptung der Dinge an sich abweisen.